

序章 あらすじ

主人公は、1人の15歳の少女。だが、外に対して、過度な恐怖を持ち、部屋から出られなかった。もちろん、部屋の出口に鍵はかかってなければ、閉じ込められている訳でもない。ただ、彼女自身が出たくないのである。言うなれば、「部屋から出る勇気のなさ」、それが彼女自身が作ってしまった錠なのである。

彼女の父親は、数年前に他界し、残った母親1人に育てられてきた。しかし、母親は、出てこない彼女に対して発狂し、これがもとで、母親から暴力を受けていた。その時はたまたま、近所の人が発見し、母親は精神科医に強制的に入れられ、最悪の事態は免れた。しかし、それが彼女をさらに外に対する恐怖を高める事となった。それどころか、もはや家の中ですら、彼女は恐怖そのものだった。

彼女が引きこもってしまったのは、親だけではない。彼女は学校でもいじめをふるわれていた。仲間はずれ、悪ふざけ、集団暴行など、彼女に対するいじめは日に日にエスカレート。しかも、PTAの圧力で担任・校長も手が出せなかった。さらに、災難は続き、彼女も二・三度、なにものかに襲われた経験がある。もはや、どこにも彼女の居場所・味方はいないのだった。

今、彼女は家に1人、部屋にしのばせていた食糧(お菓子など)で飢えをしのいでいた。もちろん、家に警察やら子供の福祉施設の人間がやってきたが、全ての人に対して信頼を持っていなかった彼女は、玄関どころか部屋すら開けなかった。

そんな生活をしていたある日、普段食糧を入れていた棚を開けてみたら、食糧が底をついていた。「……どうしよう。あつ……そういえば他の場所にもいれてあったような……。どこに入れてたかな……。」彼女は食料探し始めることに、これがこの物語の始まりである。

序章から第1章時点での登場人物

- ・主人公 15歳の少女。前述通り、引きこもり中。故人である祖母とは仲が良かった。

- ・父親 数年前に他界。

- ・母親 主人公の引きこもりで発狂、主人公に対する虐待後、精神科に入院。

- ・同級生達 主人公に対して、何かにつけていじめを行う。その主犯格のほとんどが権力者である身内を持ち、学校に圧力をかけているため、担任・校長は見てもみ振りをしている。

- ・祖母(父方) 小学一年生の頃に急死。かつては主人公とは仲が良かった。

※主人公は父親の実家で、祖母とともに暮らしていた。今の主人公の部屋は元々は祖母の部屋で、祖母が亡くなった後、主人公がこの部屋を自分の部屋にしていた。

舞台は沖縄。

第1章 あらすじ

(食糧探しで部屋を探索する所から、物語が始まる。部屋には入れられる棚が多くあり、そこを開けて食糧を探す。が、どの家具を探しても、何も無かったり、物語上特に関係ないものが入っていたりしていた。何も入っていないと分かった主人公は、直接行ける隣の部屋に不本意ながらも行く事にした。その部屋では大きなタンスがあり、所々にカギがかけられている。そのタンスの真ん中を開けると、中から 5 つのダイヤルがある金庫と謎の手紙が見つかる。中には、ダイヤルを開けるヒントを探すように伝える文章とカギがおいてあった。あてがなかった主人公はここに食糧が入っているかもしれないと考え、部屋を探索する事に。探索の末、主人公は金庫を開ける事が出来た。しかし、入っていたのは手紙一枚。イライラしながらも主人公はその手紙を読んでみる。そこには、祖母が主人公宛てに書いた手紙だった。実は、祖母が急死する前日、当時小学一年生の主人公と部屋の中を舞台にした宝探しゲームを行う予定で、棚の仕掛けやこの暗号は、祖母がそれを行う為に、こっそり作った物である。その際、宝を入れずに、主人公に現実には甘くない事と、どんなにつらくても諦めてはいけないという事を(手紙上で)教えるはずだったが、結局それを行う前に急死し、主人公を含め誰 1 人、このゲームや手紙の入った棚の存在を知る事は無かった。その手紙を 15 歳になって手紙を読み、「何があっても諦めてはいけない」という事を 8-9 年という月日を経て伝わった祖母の教えに涙を流す主人公。そして、祖母の教えを持った主人公は部屋の扉を開ける事が出来るのである。主人公はついに恐怖だった外に出られるのだった。だが、それは同時に主人公と前に立ちあはだかる「社会の闇」との戦いの始まりだった。